
魔法少女リリカルなのは～守る力～

當摩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜守る力〜

【Nコード】

N3556Z

【作者名】

當摩

【あらすじ】

俺があの時守れていたら・・・

でも今は違う・・・必ず守ってみせる

紹介

どうも當摩^{トウマ}です。ちなみにとあるシリーズの当麻ではありませんのであしからず。ここで書かしてもらうのは初めてです。色々至らぬ点があると思いますがよろしくお願いします。この小説は最強チートプラス原作キャラとの恋愛小説です苦手な人は回れ右です。それでは魔法少女リリカルなのは〜守る力〜よろしくお願いします。

當「さあ始まったな。」

???「だな。」

當「これはこれはこの小説の主人公の???じゃないか!」

???「てかいつまでも???じゃ嫌だから早く進めろ・・・」

當「そうだなじゃあ一緒に」

2人『魔法少女リリカルなのは〜守る力〜始まります』

ブログ（前書き）

こんにちは當摩です

昨日はスイマセン更新できなくて少し用事できたんで
昨日は更新できませんでした

ではごっご

プロローグ

「…きて…お…てお兄ちゃん!」

(誰だ俺の眠りを邪魔する奴は)

そう思いながらもつ一度寝ようとする

「仕方がないな〜じゃいつくよ〜」

朝からハイテンションな声が聞こえてくるが何も聞こえない、そう
思いもう一度寝ることにした

「えいつ!」

「ぐぶっ!…!」

なぜかいきなり腹の辺が急に苦しくなり起きると…

「おはよ〜お兄ちゃん朝ごはん出来てるよ〜」

そう俺の妹が乗っていた

「遥なぜ俺の上に乗っている…」

そう俺が質問すると

「お兄ちゃんが寝てたから起こした」

「起こしてってくれるのはかまわないがもう少し優しく起こしてくれ」

「最初はそうしたけどだってお兄ちゃんなかなか起きないんだもん」

「だとしてももう少し別の起こし方があるだろ…」

「例えば？」

そう聞いてくるから俺は少しからかってやるうと思いふざけて答えてみた

「じゃあ遥がキスして起こすとか？」

そう言う遥は

「ふえ！？そそそそんないつくら仲が良くてもきき兄妹同士でそれははないんじゃないかな」

顔を真っ赤にして慌てて言ってきた

「でもお兄ちゃんがどうしてもって言うんなら仕方がないかな」

うつむきながらそんなことを言ってきた。あれえなんかおかしな方

向になつてきた
とりあえず冗談という

「遙あのー一応冗談なんですけど」

「へっ？そつそつだよねふっ普通兄妹はそんなことしないよね」
ごめんね

お兄ちゃんがいきなり言い出したからびっくりしちゃって、じゃあ
ご飯出来
てるから早く着替えて下に降りてきてね。」

「ああ。それとおはよう遙」

そう俺が言つと遙も落ち着いてきたのか

「おはようお兄ちゃん」

と笑顔で返してきた

そして遙がでつていったあと俺は着替えて下に降りて行った

「おはよう母さん」

「おはよう翼早くご飯食べないと学校遅刻するわよ」

「わかってるよ」

そして食べ終わると少しゆっくりして遙と一緒に学校へ行く

プロローグ（後書き）

翼「どうも翼です」

當「どうでしたか」

翼「どうもこうもこんな駄文読む奴いるのか？」

當「いるさ！きつと……」

翼「はあー最初からそんな弱気でどうするんだよ。作者なんだからもつとしっかりしろよ」

遙「そうだよ！」

當・翼「うおっ！！」

遙「二人ともひどいよ最初から居たのに無視するなんて」

當「すいません」

翼「すまん遙全部悪いのはこいつだから」

當「えっ！？それってどういっ……」

遙「O・H A・N A・S H Iするっ」

當「いやあああああ」

翼「馬鹿はほつといて」

翼「こんな駄文を読んでくれるみなさんありがとうございます。
これからも

魔法少女リリカルなのはを守る力をよろしくおねがいします」

プロローグ2（前書き）

どうも當摩です今回は遅れずできました。これ続けていければいいなと思います

翼「続けていけるのか？」

當「頑張る！！」

翼「気合だけはいいな？いつに止まるやら」

當「止まらせる気はない」

翼「まあ頑張れ。じゃあ」

2人「「始まります」」

プロローグ2

俺たちはあの後遙と一緒に登校いつもどおりに授業を受けいつもどおりに友達とアニメやゲームの話をしていた。

そうこのままいつもどおりにいつもの日常がくると思っていた。

しかしそれはいつもどおりの日常はこなかった。

それは帰る途中で起こった

「お兄ちゃん今日は晩ご飯何にしようか？」

俺たちの親は今日は出かけてて家にはいない。
だから今日の晩は俺が作ることになっている。

「そうだな…遙は何が食べたい？」

そう遙に聞くと

「うーん、お兄ちゃんが作るならなんでもいいよ」

「なんでもいいが一番困るんだけどな。そうだな」

俺は少し考えると

「ハンバーグなんてどうだ？」

「うん！いいよ」

といつも元気なのにさらに元気が増した

「じゃあ早速買い物に行くか」

そして買い物が終わった帰り

「えへへ楽しみだなお兄ちゃんのハンバーグ」

「そこまで期待されたら答えなくちゃな」

そして少し大きめな交差点にきて遙うかれていたのか信号が赤なのにきずいてないのかそのまま道路に出たその横からはでかいトラックがものすごいスピードで迫ってきた

「危ない遙!!!」

俺は無我夢中で走った。

しかしトラックが来るのと同時に遙かに飛びついた

結果間に合わず俺と遙はトラックにひかれた

そして俺と遙は死んだ

俺のせいだ俺がもっと速く動ければ遙を助けられたのに

そして気がつく俺は何もないところにいた

本当に何も無い真っ白な空間とても殺風景だ。

しかし横を見ると遙がいた

「おい遙おい！起きろ遙」

俺は慌てて遙を起こそうとした

「うーん？何お兄ちゃん私まだ眠いんだけど」

「アホなこと言ってるう場合か！周りを見てみる」

「周り？」

言われて周りを確認する遙

「うにゃー！どこどこ？」

「それは俺も聞きたい」

そうここはどこだと考えていっると

目の前が急に光だし光が収まると

俺と同じ年ぐらいの女の子がいた

「こんにちは柊翼くん遙ちゃん」

「あのー誰ですか？」

と俺が聞く

「私はあなたたちで言う神ですね」

ニコツとしながら言うてきた。しかもかなり可愛い

「いたっ、何するんだ遙」

いきなり遙が俺の足を踏んできた

「別に。」

明らかに機嫌悪そうだ。あれにはあまり触れないほうがいい

「そういえば俺に聞き間違えじゃなかったら神って聞こえたんだけど」

「私もそう聞こえた」

「ええそうですよ。たしかにそう言いました。」

ほんとに神だったんだ。とうとう死んだ自覚出てきた

「実はわけあってここに呼びました」

「じゃあなのはの世界で」

「わかりました。能力などはどうします?」

「チートとかでもOK?」

「大丈夫ですよ」

「じゃあまずランクがSSSで魔術回路は80で気も使えるように
それと体力と筋力はそこそこ強めで
それと宝具生成能力」

「わかりましたでは遙ちゃんは?」

「うん、よくわからないからお兄ちゃんと一緒にいいや」

「わかりました。ではあとは家などはこちらで用意します。あと
容姿は原作キャラと同じ年にしておきます。ではよき二度目の人生
を」

そうして光に包まれた

プロローグ2（後書き）

どうでしたか？自分なりにかなりチートにしたのですがいかがだったでしょうか？

次はキャラ紹介をします

當「かなりチートになったな…」

翼「てか遙が同じこと連呼しすぎだろ
もう少し文章考えろ」

當「いやーそんなに文才ないんで難しいです」

翼「諦めるなよ……まあいいじゃあ」

2人「ばいばい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3556z/>

魔法少女リリカルなのは～守る力～

2011年12月15日01時53分発行